

プロローグ 異世界転生したOL

残業続きで、今日も足取りは重かった。

人より少し背が低く、地味なスーツに眼鏡の私。髪もひとつにまとめただけ。武骨な眼鏡をかけているからか、可愛いなんて言われたことはほとんどない。普通のOL。正義感が強めなので、困っている人を放っておけないくらいが、私の取り柄かもしれない。

「はあ……疲れちゃったな」

夜とはいえ、東京は車どおりも人通りも多い。疲れているのでタクシーでも

拾おうか、なんて思い、振り向いてタクシーが来ないか見ている時だった。

あれ……大丈夫かな？

スマホを見ている母親と、子供が目に入った。子供はおもちゃで遊んでいる。すると赤信号にもかかわらず、母親の手を振りほどいて横断歩道に子どもが、駆け出してしまった。その向こうからは、ヘッドライトが近づいている。

「ちよっ！ 危ない！」

反射的に、私は鞆を放り出し、子どもに駆け寄って腕を掴み歩道に投げた。その瞬間、眩しいライトが視界を覆う。

トラック！？

ブレーキ音が悲鳴のように響き、重たい衝撃が私の身体を押し潰した。

痛みも、声も、何も出ない。

ただ子どもが、泣き叫びながら親に抱きしめられているのを見た。

ああ……あの子……助かったんだ……。

全身の力が抜けていく。

そうか……私、死ぬんだ。

暗闇に飲み込まれ、意識は途切れ、涙が一筋だけこぼれ落ちた……。

……。

「あれ……」

何かが変だ。病院にいる感じじゃない。というか、私は息をしている。

薄っすらと目を開いてみる。

まだ……外？

……だが気がつけば、ひんやりとした草の匂いに包まれていた。

はつきりと瞼を開けると、広がるのは見たこともない森。高く伸びる木々。鳥の声。土の冷たさ。まるで、絵本の森に迷い込んでしまったみたいだった。

「……え？ も、森い？」

驚いて飛び起き、周りを見渡すが、間違いなくそこは森の中だった。

あれ？ 確かに、トラックに轢かれて死んだはず。なのに、どうしてここに？

理解が追いつかず、頭に抱えていると、不意に、ガサリと草むらが揺れた。目を向けた瞬間、全身が凍りつく。そこに立つ、大きな影に言葉を失う。

鋭い牙、赤く光る瞳。角の生えた二メートルもある狼？

地響きのような唸り声とともに、獣は私の周りをうろついている。

「あ、あ、あ……」

パニックだった。まったく理解が出来ない。私が慌てて逃げようとした時、それは飛びかかってきた。全身が硬直する。鋭い牙が喉元めがけて迫ってくる。

「きやあああああ！」

「伏せろ！」

低く鋭い声が、大きく森に響いた。次の瞬間、風を裂くような音とともに、何かが飛んでくる。飛んできたのは、一本の槍。角の生えた狼の首に刺さり、苦悶の声をあげ地面に崩れ落ちた。

どさり！

「な……」

私は呆然としたまま、背後に立つ人影を見上げた。全身黒ずくめの外套に、

精悍な顔立ちと影を落とすフード。まるで絵本に出てくる狩人そのものの姿。

「怪我はないか？」

差し伸べられた大きな手に、思わず息をのんだ。その声は驚くほど穏やかで、怪物を仕留めた人と同じとは思えないほどだった。

「だ、大丈夫です……あ、ありがとうございます」

震える声でそう返すと、彼はじっと私を見つめ、眉をひそめた。

「見たことのない服だな。どこから来た？」

説明できるはずがない。だって私は、さっきまで日本で……。

言葉に詰まる私を、じつと観察するように見つめてくる。その瞳は鋭いの、不思議と冷たくはなかった。どこか日本人に見えなくもない、黒髪と黒い瞳。

「立てるか。ここは危険だ。小屋がある、ついてこい」

そう言うと、彼はためらいなく私の腕を引いた。力強く、けれど優しい手。足がすくんでいた私も、ようやく引かれるままに歩き出していた。彼とともに、深い森を抜けると、ひっそりと佇む小さな木造の小屋が現れた。古びているが、煙突からはかすかに煙が立ち上っている。それに人の暮らしの温もりを感じて、

私はようやく胸を撫で下ろした。

「入れ」

彼が扉を開けると、木の香りと焚き火の匂いが入り混じった空気が広がった。粗末ながらも整理された室内。炉には赤々と火が燃え、壁際には狩猟道具や槍が並んでいる。簡素なベッドとテーブル。人がひとり暮らすには十分な空間だ。

「座れ。……腹は減っているだろう？」

確かに会社帰りで、何も食べていないからお腹はぺこぺこだった。

「はい……」

彼は鍋を火にかけて煮立たせ、素早く木の椀に注いだ。湯気の立ち上った、温かいスープを差し出され、私は戸惑いながらも両手で受け取った。

「食え」

「……いただきます」

一口含むと、温かさが喉を通り、張り詰めていた心と身体が少し解けていく。森での恐怖も、震えも、少しだけ和らいできた。それに、とても美味しかった。

「どうだ？」

「……美味しいです」

そう呟くと、彼はわずかに目を細める。私は、黙々と自分の分を口に運ぶ。
沈黙が落ち着く前に、彼が唐突に切り出した。

「どこから来た？」

やはり、その質問。けれど、たぶん正直に日本と言つても通じるはずがない。
私は迷いながらも、遠くからですと答えるしかなかった。

「遠く、か」

彼は低く呟き、視線を逸らさない。その目は探るようで、妙に優しい熱を帯びている。

「見たこともない服に、魔獣の知識もない。……君は、何者だ？」

「わ、私は……普通の人間です。本当に。信じてもらえないかもしれないけど」

必死に訴える声は、震えていた。彼はしばらく無言で私を見つめていたが、やがてふっと口元を緩めた。

「……そう怯えるな。ここにいる限り、危険は及ばない」

その言葉に胸が熱くなり、ホッと緊張が解ける。信じられないような現実。

こんな森の中でただひとり、この見知らぬ男の言葉だけが頼りだった。

「ごちそうさまです」

「ああ。口にあったかい？」

「本当に美味しかったです」

「そうか、ならよかったよ」

私が椅子の上で深く息を吐いたころには、外はすっかり闇に包まれていた。窓の外から聞こえるのは、虫の声と、時折遠くで響く獣の鳴き声。迷い込んだ見知らぬ世界の夜は、どこか不安をかき立てる。

パチン！ と炉の木が爆ぜる。

小屋の中では暖炉の火が揺れて、不思議なほど暖かった。私は疲れ果てて、椅子に凭れかけたまま瞼を閉じてしまいそうになる。

「……眠いか？」

低く響く声に、はっとして顔を上げる。彼は焚き火の赤い光を背にしながら、じつとこちらを見ていた。その瞳は先ほどまでと違う。獲物を狙う獣のように、熱を帯びている。男の……目だ。男に慣れていない私でも、その私を見る目が、性的なニュアンスを帯びている事くらいわかる。

「な、何ですか……？」

思わず身を引くと、彼はわずかに口角を上げた。笑っている……だけれど、それは安堵を与えるものではなく、どこかいやらしい気配を含んでいた。

「珍しい女だと思ってな。こんな森の奥に迷い込んでくるなんて」

彼が立ち上がり、ゆっくり近づいてくる。焚き火の光に照らされるその影が、
どんどん大きく迫ってきた。

嘘……怖い。でも、男と女が二人きり……そんな事が起きてもおかしくない。

鼓動が速くなる。

彼はずっと優しくそうな眼をしているし、何もしないと信じたいのだけれど、その視線が私の身体を舐め回すように動いているのを感じた。

「……怖い顔、してますよ」

ようやく絞り出した声に、彼は低く笑った。

「怖がらなくてもいい。……俺は、お前を守る」

言葉は優しい。けど射抜くような眼差しは、確かに私の身体そのものを見ていた。焚き火の影の中で、彼の瞳は赤く煌めいている。守ってくれると口では

言いながら、その眼差しは、まるで私を食べ物のように見ている気がした。

……これ、危ない……！

全身に鳥肌が立った。襲われる。そう直感した。

「……すみません、やっぱり、眠れそうにないので……」

立ち上がった私を、彼の大きな手が掴もうとする。瞬間、反射的に私は腕を振りほどいた。ガタン、と椅子が倒れる音が響く。驚いた彼が一瞬だけ動きを止めたその隙に、私は扉へと駆け出した。

「おい！」

ボタン！

扉を開ければ、夜の森は真っ暗だった。頭上には無数の星が瞬いているが、木々の影は深く、先が見えない。それでも、私は足の赴くままに走った。

「はあはあ」

枯れ枝を踏む音が、やけに大きく響く。息はすぐに荒くなり、胸が焼けつくように苦しい。真っ暗で先も見えずに、私は突然心細くなってきた。

私は……バカだ。どこに行けばいいの……？ でも、戻るなんて出来ない。

考えかけたその時。

ズシン。

「えっ……」

地面が揺れた。

次の瞬間、前方の闇から現れたのは、三メートルをゆうに超える巨体。血走った目、歪んだ牙。肌は岩のように赤黒く、肩には棍棒を担いでいる。

「ひっ……!!」

全身の力が抜け、足が竦む。そいつは、ニタリと笑ったように見えた。

ペタン……。腰が……。抜けた。

「お、鬼？」

「ガアアアアアアア！」

次の瞬間、太い爪が振り下ろされスーツが裂けた。

ビリビリビリ！！！！

冷たい夜風に胸をさらし、喉の奥から恐怖がこみ上げた。

「きやあああああ！！」

必死に叫んだ瞬間。空気を切り裂く鋭い音とともに、槍の穂先が闇を貫いた。その槍は、目の前の巨大な鬼の顔の中心から入り、後頭部に抜けてそのまま大木に突き刺さる。

「ひっ！」

なんと、その鬼は体をビクビクさせながら、そのまま串刺しになって息絶え、木にぶら下がっている。そこに彼がやってきて、その分厚い足首に手をかける。

「……重そうだな」

それでも、ためらわず槍を引っ抜いた。ずるりと抜けた槍から崩れ落ちた鬼の体。ビュンと槍の血を振り払い、私を見下ろして言った。

「なぜ小屋を飛び出した？」

「す、すみません。あの、混乱してしまつて……」

「服が破れたのか」

見ればスーツの前が破かれ、ブラジャーも切れ落ちていた。薄っすらと胸が傷ついており、軽く血がにじんでいる。

「あっ」

慌てて隠す。

「手当をしてやる。戻るぞ」

彼は、その巨大な赤鬼の足首を掴んで、血まみれの死体を引きずり始める。どうやら、このまま持ち帰るようだ。

ずるり、ずるり……。

夜の森に、重たい肉塊を引きずる音が響く。赤黒い血が土を染め、不気味さを放っていた。男はただ無言で、鬼の死体を引きずったまま、前を歩いていく。木造りの離れ小屋の前に立つと、軋む扉を足で開いた。

ギイ！

「っ……っ！」

彼の背後には、ずるずると床を汚しながら引き込まれていく巨大な赤い死体。鉄と血の臭いが、一気に狭い小屋を満たしていく。

男が死体を放り出すと、荒い息をつきながら振り返った。その瞳は赤く光り、獲物を仕留めた狩人のものではなく、獲物を前にした獣の光を宿している。

「……見たか？　こんなのがうろうろしてるんだ」

低い声が小屋に落ちる。私の心臓は強く跳ね、後ずさる足が床を鳴らす。

……逃げ場のない小屋に、二人きり。

重々しい沈黙の中、男はゆっくりと鬼の死体の足に手をかけた。血と泥で赤く染まった腕の筋肉が盛り上がり、軋む音が響く。私は小屋の隅で身を縮め、目を逸らせない。心臓が胸を突き破りそうに速く打ち、体がすくんで動けない。

「そうか、レッドオーガを見るのは初めてか」

私はただ頷くしかなかった。恐ろしい鬼の姿だが、人間に近い形をしている。その死体を見て、現代日本から来た私が、震えないでいられる訳がない。

ギシ。

男は無言のまま、死体を小屋の一角に固定した。その動作はとても正確で、冷たく、そして異様に落ち着いていた。

「……な、何を……？」

震える声に、男は軽く振り返るだけで答えなかった。そして鉄のこぎりやら、ナイフやらを取り出してレッドオーガに突き立てる。

ごり、ごり、と死体を切り分ける音。鉄と血の匂いが小屋の中を支配する。私の吐息は浅く、呼吸するのも怖い。

というか……吐きそう。

男は淡々と作業を続けるが、動作には全くの感情の揺れがないように見えた。ただ仕事として、狩猟者の手際だけが冷徹に動き続ける。

ガチガチと歯が鳴り、震えている自分に気が付く。

そうか……私は怖いのか。でも、なにが？　男が？　それともこの行為が？

恐怖と畏怖に震えながら、私はただその行為を見守ることしかできなかった。恐ろしいこの男の前では、何もできない。逃げることも、抗うこともできない。

「ふう……」

作業を終えた男は、火を出してレッドオーガの血を焼き、刃物を片付ける。その動作は異常に落ち着いているが、恐怖の余韻だけが私の胸に残った。

小屋の中に漂っている、血の匂いと緊張の余韻。私は震える手で膝を抱え、目をそらすことしかできなかった。

しかし、男は静かに近づいてくる。

「家に戻ろう。もう、飛び出すな」

私はただ頷く。処理小屋を出て庭を歩き、最初に連れていかれた小屋に戻る。すると彼は、ぎこちなくも丁寧に椅子を差し出す。

「……座れ」

低く響く声に、私は違う熱を感じる。その声は、今までの冷徹さとは違い、優しさを帯びていた。

「……わ、わたし……」

それ以上の言葉が続かない。けど男は何も言わず、ただそっと私を見つめ、火の近くに座るよう促す。

「寒いだろ。震えている」

この震えは寒さだけじゃなく、恐怖によるもの。だけどこの小屋の暖かさが、恐怖で張り詰めた心にゆっくり沁みる。彼は自然に、膝に毛布をかけてくれた。

えっ……わたし……守られている？

彼がレッドオーガを殺した後の、殺意にも似た、赤く光った怖い目線の後、この静かな保護感。私の胸は、なぜか不思議な熱さと安堵で満ちていく。

さらに、男は静かに言った。

「外は危険だ。無理をするな。ここにいれば安全だ……お前は俺が守る」

低く揺るぎない声。その言葉に、胸が締め付けられるような安心感を覚えた。恐怖の森の中で、ただ一人の存在の彼だけが、自分を守ってくれるのだ。

そして、毛布にくるまれて暖炉の炎で温まっているうちに、残業の疲れと、ここに来てからの衝撃的な出来事で疲労した私は、うとうとし始めるのだった。

ヤバイ……。でもダメ……。意識を保ってられない。

クラクラしながら、私はそのままテーブルにつつぷして寝るのだった。

第一章 突然、魔の森に現れた女（男視点）

小屋に戻り、死体処理を終えた。だが呼吸は荒く、体の震えが抑えられない。

俺は……今日、狼とレッドオーガを仕留めた。魔素を浴びてしまったな。

狩りの興奮と魔獣たちから浴びた魔素が、べったりと肌に纏わりつく感覚。魔素が体内に流れ込んで、心臓を早鐘のように打つ。冷静を保とうとしても、血流が熱を帯び身体の奥が疼き始める。

くそ、むらむらが止まらん！ しかし、槍を振りに出れば、女は逃げる。

握った槍の感触、荒々しい戦いの記憶と魔素が、理性を徐々に溶かしていく。胸の奥の抑えられぬ感覚。それは狩りの興奮だけではなく、明らかに性欲として昂ぶる。

いままで魔獣を倒した後は、一人になるのが普通だった。

だが目の前の女。何処から来たのかもわからぬ、小さくて華奢な女がいる。小屋で震える彼女の存在が、無意識で感覚をさらに刺激する。守るべき対象、触れたくなる欲望、混ざり合う昂ぶり。

困った。

体の一部が熱を帯び、手のひらが微かに震える。理性で押さえようとしても、もう限界に近い。魔素が、理性をじわじわ侵食し、抑えが利かなくなっていく。

まずいぞ。この熱は、どうやっても収まらない。

魔獣の魔素が血流に混じり込み、体の芯から、この疼きを生み出している。理性を突き崩すには十分すぎる力。だが、ここで屈してはいけない。

「ふう……」

俺は奥歯を噛み締める。槍を振るい、強い魔獣を狩ることなど慣れている。だが、このどうしようもない衝動は、戦いの最中以上に厄介だった。

……俺は、獣じゃない……。

小屋の隅に座る女が、小さく震えているのが視界に入る。その姿は弱々しく、守るべき存在だと頭では分かっている。しかし視線がどうしても、オーガに破られた服の柔らかな胸元や、乱れた髪に吸い寄せられてしまう。熱くなる呼吸。握った手のひらに爪が食い込み、血が滲むほど力を込めるが衝動は止まらない。

駄目だ……手を出しては……駄目だ……。そうだ、女の体を隠そう。

「寒いだろ。震えている」

理性で囁くが、狩りの昂ぶりと魔素の影響で、肉体は確実に俺を裏切る。

抑えろ。お前は人だ。獣じゃない。

胸中で何度も繰り返し、齒をきしませる。

「外は危険だ。無理をするな。ここにいれば安全だ……お前は俺が守る」

つい、そんな声をかけてしまった。だが、事もあるうに女は安心したような顔をして、無防備に眠り始めたのだった。

……疲れていたか。だが……。

俺の股間に熱が集まる。無防備な女を前に、滾らせるなどあつてはならん。

しかし……この女。何処から来たのだろうか？ 魔の森に一人で歩いて来た？ どう考えてもその力はない。疑問だ。とにかく、距離を置くしかない。だが、このまま机に寝かせていいのだろうか？

「はあ……」

とにかく意識を逸らすためには、何かをして気を紛らわせなければならぬ。そうだ、武器の手入れをしていない。血に濡れた槍が、そのままだった。

槍を手を取って汚れを取り始めるが、魔獣たちの魔素をまた吸ってしまった。そのせいで理性が崩れそうになる。研ぎ石に乗せて、刃を研ぐ事で集中する。

ぐおおおおお！ 落ち着け！ 落ち着くんだ！ 俺！

今にも飛びかかりそうになっているが、とにかく集中するんだ。

だが、その時。視界の隅で寝ている女がぐらりと傾いた。

「危ない！」

俺は咄嗟に彼女の下に走り、体を受け止めたのだった。

第二章 野獣のような香り

あれ？

ふわりと体が支えられる感覚に、目が覚めた。見上げると、そこに男の顔。熱を帯びた吐息が頬をかすめ、真っ直ぐな眼差しが私を射抜いていた。

「……大丈夫か？」

低い声が耳に落ちる。安心させるような響きなのに、なぜかゾクゾクした。

怖い。けど、温かい。

彼の胸の中は逞しく、鋼のように固い。その厚い胸板に触れてしまった瞬間、ぞくりと背筋をなぞる感覚が走った。

彼の瞳。優しさと、抑えきれない何か、獣のような光が混ざり合っている。その視線が、私の唇や首筋、胸元へと、ほんのわずかに逸れていく。

体を……見られてる……？

心臓が跳ねる。彼はすぐ視線を逸らしたけれど、その仕草が余計に不自然で、逆に気づいてしまう。

これ……抑え込んで。必死に、何かを我慢している。

守ってくれているのに。優しいはずなのに。なのに……怖い？

「……っ」

視線を上げると、彼の瞳が赤く光った気がして、私は思わず体を強張らせる。さっきまでの穏やかな顔とは違う。その何かを必死に抑え込んでいるような、獣じみた眼差し。その雰囲気消したかったからか、思わず口を開いていた。

「あ、あの……あなたのお名前は……？」

私の問いに、彼は短く息を止めた。胸の奥に何かを隠すような影がよぎり、

唇が固く閉ざされる。少しの沈黙。やがて、かすかに自嘲めいた笑みを浮かべ。

「……アレク、と呼んでくれ」

「アレク……さん……」

その名を口にした途端に、彼の肩がわずかに緩んだ。けれども瞳の奥では、まだ燃えるような熱が消えない。理性と欲望の境界で揺れているその視線に、私はぞくりと背筋を震わせたのだった。

私を抱き上げてた彼は、私をベッドに降ろした。静寂の中で、彼の荒い息遣いだけが耳に届く。熱い。この人の吐息が。

「……眠れ」

かすれた声でそう言いながらも、この彼の手が震えていて胸が苦しくなる。その苦しい表情が、私を守ろうと必死になっているようにも見えてしまつて。彼の情熱が、抑えきれずにこぼれ出しているのがわかる。

「……アレクさん……」

切ない気分から思わず名を呼ぶと、彼はぐつと奥歯を噛みしめ目を逸らした。暖炉の火に照らされた横顔が、赤く染まっている。小屋には、私と彼だけだ。狭い空間に、熱が充満していく。

そのときアレクの影が、私に覆いかぶさるように近づいてきた。近い。熱い。吐息が頬にかかり、思わず息を呑む。

「……すまない」

低く、苦しげな声。

その言葉の直後、彼の手が私の頬に優しく触れた。大きくて荒れた指先が、そっと輪郭をなぞる。そこからじわりと熱が流れ込んできて、心臓が跳ねる。

「離れろって、言うなら……すぐにやめる」

彼はそう告げながらも、瞳は炎に揺れている。彼が欲望を抑え込みながら、必死に縋るように。何かを堪えているのが私にも分かった。

私の唇は「やめて」と動かなかった。代わりに、胸の奥から零れ落ちるように囁いていた。

「……アレクさん……怖い怪物から守ってくれてありがとう……」

その瞬間、彼の理性の糸がぷつりと切れた。唇が重なり、熱が伝わって来る。ごつごつとした手が背を抱き寄せ、逃がさない。硬い胸板に押しつけられて、私が息を詰まらせるけど、不思議と抵抗できない。

もう、抗えない。

私の体の奥から、じわりと熱が広がっていく。彼の舌が、私の唇をこじ開け、深く絡みついた。頭が真っ白になるほどの情熱を、そのまま受け入れてしまう。視線を合わせた途端、燃えるような熱視線に射抜かれた。

「……抑えられん……」

アレクの低い声が、獣の唸りのように震えている。その荒い吐息とともに、頬をなぞる指先が首筋へと滑り、私の頭を後ろから抱き寄せて近づける。

「俺は……お前を傷つけるつもりはない。信じろ……頼む」

切なく濡れた瞳で見つめられながら、耳元で囁かれる。

「お前は……俺のものだ。誰にも触れさせない」

その声に、胸の奥が強く揺さぶられた。

初めて会ったはずなのに。どうして？

「こわ……い……です」

私の口から、震える声が漏れる。

「怖がるな……俺は獣じゃない。お前を大事にする……だから……」

そう囁く唇が頬から首へ、そして鎖骨へ、甘く吸いついていく。私の背筋を駆け上がる震えが、心をとろけさせた。ついに私も、抵抗を忘れて力を抜く。

「……我慢……出来ないの？」

上目遣いで縋るように言った瞬間、彼の瞳の奥では理性が完全に砕け散った。荒々しく押し倒され、唇を深く奪われる。ごつごつとした手が衣服をまさぐり、肌を露わにしていく。胸を覆う布地を引き裂かれる音が耳に響く。

「もう……駄目だ……君が欲しくて、狂いそうだ……」

彼の囁きは、必死の告白のようでもあり、飢えた獣の呻きのようでもあった。怖さと、抱きすくめられる安心の狭間で震えながらも、受け入れていった。

ちゆく♡♡

唇を重ね、肌を重ね、熱を分け合う。

「や……っぱり……だ、駄目……です」

抵抗の小さな声が漏れる。体を押さえつける胸板に、思わず息を詰めた。

「……駄目じゃない。俺はお前を守るんだ……」

アレクの吐息が、耳元にかかる。唇が首筋を這い、ぞくりと背筋を走った。

ちゅぷ。

「ひやつ……あ、あつ……！」

その感触に、思わず体が跳ねた。経験が無いのに、心は熱い。疲労した体は、まどろみの中で、その愛撫を受け取るのを拒否してない。

「怖がるな……怖いのは、もう終わりだ……」

低く唸る声とともに、手が胸をまさぐる。ずきゅん、と心臓まで響く。

「いやっ……は、はずかし……」

体が小刻みに震える。手のひらの温もりと、力強く抱きしめられる感覚に、抵抗する力がどんどんぬけていく。

「……アレクさん……わたし……」

名を呼ぶと、彼は軽く息を漏らして、唇を深く重ねてくる。

んっ、んぐっ。　熱く、深く甘く絡みつく唇。

「……君は俺のものだ……誰にも渡さない……」

囁く声が、荒く甘い。掌が腰を伝い、背中に回ってぐっと引き寄せる。

「んっ……あっ……だめっ……!!」

彼の切ない表情に、声が途切れ途切れになり、体が勝手に反応する。

「怖いかな？　でも……これが、俺の愛なんだ……」

額に額をくっつけ、息を混ぜながら囁く。

「はあ、はあっ。美しい……」

熱と、湿り気が体を包む。心臓の鼓動に合わせて体も揺れ、熱い愛に抗えない。彼の熱が私の全身を焼き始め、頭は真っ白になっていった。

すると、アレクの手が股間に伸びる。

「……んっ、だめっ……そこ……っ」

私のスカートがずるりとずり下げられ、指はしげみを降りて行った。

「あ！」

「君のを、触りたいんだ」

小さな声が漏れ、アレクの息遣いが荒かった。体を押さえつける胸板の下で、アレクの指がするりと肉壁の割れ目に落ちた。

くちやあ
♡

「んあ！」

その指は、更に執拗に割れ目に触れてくる。くちゅ、くちゅと湿った音が、

私の耳に響いて、羞恥心で焼かれそうになる。

「だめえ。聞かないで」

「駄目じゃない……君は俺のものだ……聞かせろ、全部……」

「あつ。ああ！」

低く唸る声に、背筋がぞくぞくと震える。

くちゅ♡ くちゅ♡ ちゅぷ♡♡♡♡

「やつ……あつ……やああつ……！」

怖い。だけど、荒々しく暴れ続ける指の動きに、体が勝手に反応してしまう。
おまんこの奥まで熱く押し込まれるような快感に、声がかすれて途切れる。

「……んっ、お前の声も、全部俺に聞かせてくれ……」

耳元で囁きながら、指先は容赦なくクリトリスを擦る。

くりゅ！　くちゅ、じゅぽっ
♡♡

体の奥が熱く焼け、意識が甘く蕩けていく。